

ベンジャミン・フランクリンの成功と彼の印刷ネットワーク

竹腰 佳誉子

Benjamin Franklin and his Success through his Printing Network

Kayoko TAKEGOSHI

E-mail : kayoko@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：ベンジャミン・フランクリン，印刷業，プリントネットワーク

keywords : Benjamin Franklin, printing business, printing network

I はじめに

ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) と言えば，セルフ・メイド・マンの体現者であり，人々が彼のことを幾分憧れを抱いて尊敬するのは彼がアメリカン・ドリームを実現したからであろう。フランクリン自身，著書 *Autobiography* (『自伝』) の冒頭において「私は貧しい賤しい家に生まれ育ち，のちに次第に身を起して富裕の人となり，ある程度世間に名の知られ，かつこの年になるまでかなり幸運に恵まれて日を過ごしてきた・・・」(BF 1307) と述べたり，あるいは兄ジェームズ・フランクリン (James Franklin) の元での徒弟としての奉公を逃げ出して，フィラデルフィアに到着した際の様子を次のように語っている。

I have been the more particular in this Description of my Journey, & shall be so of my first Entry into that City, that you may in your Mind compare such unlikely Beginning with the Figure I have since made there. I was in my working Dress, my best Cloaths being to come round by Sea. I was dirty from my Journey; my Pockets were stuff'd out with Shirts & Stockings;... (BF 1328-29)

このようにフランクリンは，非常に貧しい身分であった過去と成功者となった現在とのギャップに読者の注意を否応なしに向けさせている。

しかしながらパメラ・ウォーカー・レアド

(Pamela Walker Laird) は，フランクリンは彼と同年代の若者と比較するとそれほど貧しいわけではなかったと指摘しているし (Laird 12)，ゴードン・S・ウッド (Gordon S. Wood) は，フランクリンは少なくとも2年間正式な学校において教育を受けており，それは同時代の他の大勢の少年たちと比較すると決して少ない年数とは言えないと述べている (Wood 18)。また革命期のリーダーたちの多くが大学を卒業している一方で，ジョージ・ワシントン (George Washington) のようにフランクリンと同程度にしか正式な学校教育を受けていない者たちがいるのも事実である。つまりフランクリンは彼が『自伝』の中で語るほど貧乏でもないし，教育を受けていなかったわけでもないのである。フランクリンのキャリアは特異であり，ウッドが言うようにホレイショ・アルジャー (Horatio Alger) が描く次世代のスター「ぼろ着のディック」(“Ragged Dick”) を先取りしていたという見方は確かに少し間違っているのかもしれない (Wood 25)。レアドは，我々がフランクリンの類まれなる才能のおかげで，彼を成功に導いたネットワークの重要性について見落としていることを指摘し (Laird 12)，ウッドはフランクリンの成功は彼の後援者によるものであると述べている (Wood 26)。フランクリン自身『自伝』において，自分が出会った，あるいは関わった人物たちを次々に紹介していく過程のなかで，いかにその出会いが自分自身を成功へと導いてくれたかということを率直に語っているのである。

本稿では，印刷業に関わるフランクリンの人脈，あるいは人脈づくりに着目し，順を追って述べていきたいと思う。それによって，そのネットワークが

フランクリン自身にとって、ひいては植民地にとって何をもたらしたのか、植民地独立にいかに関与したのかということも明らかにされると思われる。

II フランクリンと印刷業ネットワーク（1）

フランクリンは多才な人物であり、あらゆる分野において活躍を遂げたことは周知の事実であるが、彼自身は生涯プリンターを自負していたと考えられる。それは1728年に発表した墓碑銘に「プリンター、ベンジャミン・フランクリンの肉体。表紙が汚れ、金文字が剥がれおちた古い本のように、ここに横たわり虫の餌となる」（強調筆者 BF 91）と書き、決意表明のごとく自らを「プリンター」と表現していることから分かるだろう。フランクリンの成功は、まさに彼が印刷業に携わったことからスタートしているのである。

フランクリンが初めて印刷業に関わったのは、ボストンで印刷業を営んでいた兄ジェームズ (James) のもとでの徒弟奉公時代にさかのぼる。フランクリンは自分の印刷技術に自信を持ち、5年後の1723年に徒弟契約の終了を待たずして兄の元を逃げ出す。

フランクリンはまずニューヨークを訪れている。ボストンの印刷業界は、すでに4人の印刷業者と3つの新聞があったので、フランクリンはボストンでの自身の活躍を見込めないと考えたのであろう。ニューヨークでフランクリンは印刷業者ウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford) のもとを訪問する。ブラッドフォードは、もともとペンシルヴェニアで最初の印刷所を開いていたが、ジョージ・キース事件のためニューヨークに移転していたのである¹。ブラッドフォードは、自分の印刷所では手が足りていることを理由にフィラデルフィアで印刷所を営んでいる息子アンドリュー・ブラッドフォード (Andrew Bradford) を紹介する。早速フランクリンは、フィラデルフィアへ行きアンドリュー・ブラッドフォードの印刷所を訪ねる。しかしここでも人手が足りていることを理由にフィラデルフィアにもう一軒ある印刷業者サミュエル・キーマー (Samuel Keimer) を紹介されるのだった。幸いキーマーに雇ってもらい、フランクリンはこのフィラデルフィアの地で成功の足がかりをつかむことになる。

当時印刷業はパトロンたちの後援があって成り立っており、自由な商業取引は行われていなかった。州

や教会の仕事、つまり彼らから依頼される印刷がほとんどであり、州や教会が実質パトロンの役割を担っていた。当然のことながらそこには持ちつ持たれつの関係が保たれ、オープン・プレスの原理は存在していなかった。

州や教会の仕事はアンドリュー・ブラッドフォードが請け負っており、キーマーは個人の支援（パトロン）を獲得する必要が不可欠であった。また当時パトロンたちは街の優れた若者たちの支援までも担っていた。優れた若者たちの発掘、別の言い方をするとフランクリンのような若者がその土地の有力者と出会うことは、当時のコミュニティの大きさを考慮すると実のところ今の我々が想像するほどそれほど難しくないことが分かる。

フランクリンが兄の印刷所のあるボストンを逃げ出す三年前にあたる1720年のボストンの人口は12,000人であり、一方フィラデルフィアの人口は7~8,000人であった。ボストンの白人男性の人数は3,000人以下であり、フィラデルフィアの場合はその半分に満たないとされている (Laird 12)。してみれば、フランクリンのような優秀な若者がいわゆるエリートたちの目に留まることは驚くべきことではない。とりわけ印刷業は仕事柄そのような類の人たちと会う機会が多いのであるから。

実際フランクリンの仕事ぶりを見て彼を支援したいと申し出る街の有力者たちがすぐに現れている。パトロンたちの役割は、お金の支援、自宅への招待、他の有力者への紹介、そして特に重要なことがいわゆる「友情関係」を育むことであった。キーマーの印刷所のパトロンたち、例えばフィラデルフィア判事で裕福なウィリアム・アレン (William Allen) はフランクリンの優秀さに気付き彼を支援し続け、特にフランクリンが郵政長官代理の地位に就く際に尽力している (Wood 27)。またキーマーの印刷所を出入りしていたフィラデルフィア知事ウィリアム・キース (William Keith) もフランクリンの技量に目をつけ、彼に独立して印刷所を開くよう提案している。その他当時重要な友人関係にあった人物として、キューカーの商人であるトマス・デナム (Thomas Denham) と弁護士のアンドリュー・ハミルトン (Andrew Hamilton) を挙げることができる。デナムは、先に触れた知事キースのフランクリンへの提案について、キースは信用できない人物であり、よって彼の提案が当てにならないものであ

ることを指摘し、フランクリンがトラブルに巻き込まれるのを未然に防いでいる (BF 1344)。ハミルトンはフランクリンと生涯に渡って結びつきがあり、彼の支援は、フランクリンが1728年にフィラデルフィアにヒュー・メレディス (Hugh Meredith) と共同で印刷所を構えた時、そして1730年独立開業した時にその効力を発揮することになる。

先述したように、フィラデルフィアの州会の御用印刷人はアンドリュー・ブラッドフォードであり、その状況下で彼と競い合うことはフランクリンにとって大きな困難を伴うものであった。しかし印刷所を構えたその年に、アンドリュー・ブラッドフォードの印刷が粗雑で誤りも多いことからフランクリンが州会の印刷の仕事を勝ち取ることになる。このことについてフランクリンは『自伝』の中で、「州会にいた友達の中では、前に言ったハミルトン氏のことを忘れてはいけない。氏は当時すでにイングランドから帰って州会に席を持っていたが、この御用印刷人のことでは非常に私のために奔走してくれた」 (BF 1365) と述べ彼の支援に感謝の意を示している。フランクリンはハミルトンを通じて他にも仕事を獲得しており、それらについても『自伝』のなかで触れている。

I soon after obtain'd, thro' my Friend Hamilton, the Printing of the NewCastle Paper Money, another profitable Jobb, as I then thought it; small Things appearing great to those in small Circumstances. And those to me were really great Advantages, as they were great Encouragements.— He procured me also the Printing of the Laws and Votes of that Government which continu'd in my Hands as long as I follow'd the Business.— (BF 1368)

このようにハミルトンはフランクリンの仕事の獲得に一役買っているわけだが、彼のフランクリンに対する信頼は、1729年にフランクリンが発表したパンフレット “A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper-Currency” 「紙幣の性質と必要」にあると考えられる。パンフレットの中でフランクリンは、紙幣増発に賛同する意見を書いており、『自伝』において次のようにこの件に関して

述べられている。

…the Point was carried by a Majority in the House. My Friends there, who conceiv'd I had been of some Service, thought fit to reward me, by employing me in printing the Money, a very profitable Jobb, and great Help to me. (BF 1368)

「州会の私の友人たち」の中には当然ハミルトンも含まれており、ハミルトンはフランクリンのパンフレットに彼の論客者としての才能を見出していたのである。だからこそ彼は1730年フランクリンが州の御用印刷人になったこと、1736年州会の書記になったことに関して惜しめない協力を申し出たのである。州会書記の選出についてフランクリンは「私の出世の第一歩を踏み出した」時であると位置づけ、書記の地位に関して以下のように語っている。

I was however chosen; which was the more agreeable to me, as besides the Pay for immediate Service as Clerk, the Place gave me a better Opportunity of keeping up an Interest among the Members, which secur'd to me the Business of Printing the Votes, Laws, Paper Money, and other occasional Jobbs for the Public, that on the whole were very profitable. (BF 1403)

ハミルトンは、ニューヨークのプリンターであるゼンガー (Zenger) 事件² の弁護士を担当しており、彼のオープン・プレスの概念がフランクリンのそれと一致していることも二人の関係を強固なものにした理由のひとつであると考えられる。

すでに二軒の印刷所があるフィラデルフィアにおいて印刷所を開業することは若いフランクリンにとっては挑戦だったと思われる。しかしながら、先の二人の印刷業者の印刷技術が自分より非常に劣っていたことも判明し、フランクリンは自身の印刷技術や勤勉に仕事に取り組むその姿勢が周囲の目に留まり、それが印刷所の成功の要因のひとつであることを次のように述べている。

Another was, that the leading Men, seeing a

News Paper now in the hands of one who could also handle a Pen, thought it convenient to oblige & encourage me. (BF 1365)

徒弟奉公を途中で投げ出し、22歳という若さで印刷所をオープンさせたフランクリンの事業の成功の陰にはフィラデルフィアの有力者たちの支援、言い換えるならばフランクリンの周りにいる支援者のネットワークが不可欠であったことはいうまでもない。さらにその支援は印刷所の成功に留まることはなく、フランクリンをフィラデルフィアにおける要職へと導くことになるのである。フランクリンの支援者から成るジェントルマンネットワークは、フランクリンを一人前にし、ネットワークの一員とし、さらには彼をネットワークの中心に据えたのである。

同じ時期フランクリンは上記で挙げたようないわゆる街のエリートたちと出会っただけではなく、自分と同じように野心のある若者たちと出会い、彼らとジャントー（“Junto”）という勉強会組織を形成している。フランクリンは組織内で相互の向上を図り、この新しいネットワークでもって18世紀を支配していたいわゆる特権階級（ジェントルマン）たちのネットワークに対抗しようとしたのかもしれない。ジャントーのメンバーには、公証人の証書の写字をしていたジョーゼフ・ブライントナル（Joseph Breintnal）、数学者のトマス・ゴッドフリ（Thomas Godfrey）、測量士のニコラス・スカル（Nicholas Scull）のほか、靴屋職人、指物師などがいた。彼らについてフランクリンは「この連中はみんな骨を折って仕事を取ってきてくれた」（BF 1362）と述べているように、フランクリンはエリートたちだけではなくフランクリンと志を同じくするような若者たちにもいろいろな面で支えられていたことが分かる。またジャントーの会員であったロバート・グレイス（Robert Grace）とウィリアム・コールマン（William Coleman）は、当時フランクリンが同じくジャントー会員であったメレディスとの印刷所の共同経営に関して反対し、フランクリンに開業のための資金を渡してまで彼の独立に力添えしてくれたのである。

ジャントーは、フィラデルフィアの有能な若者を結ぶネットワークとして機能し、さらにフランクリンはこのネットワークを通じてフィラデルフィア全体の公共善や公共心の向上を目指していたよう

に思われる。このことはジャントーでの議論を通じて誕生したアメリカ最初の図書館の設置に始まり、市の夜警団の結成、消防組合の結成などに現れているといっていよう。そしてこの若者たちの知識のネットワークは、ジャントー結成から17年後にあたる1744年に「アメリカ学術協会」の設立によりさらに拡大を目指すことになる。このことについては紙面の都合上別の機会に述べたいと思う。

Ⅲ フランクリンと印刷ネットワーク（2）

フランクリンの始めた印刷業が事業として順調に拡大していくのと並行して、フランクリン自身もこの印刷業界において有利な立場へと登っていく。1737年にフィラデルフィアの郵便局長になり、1753年に郵政長官代理、さらに1775年にはアメリカ郵政長官にまで上り詰めている。当時郵便局は情報交換そして情報管理の場であり、まさにフランクリンは情報の中枢にいたと言えよう。そしてフランクリンは自分自身の印刷ネットワーク拡大に向けて尽力することになる。

フランクリンの本格的な印刷ネットワークのスタートは、メレディスとの共同経営を解消し、単独経営を始めたころにさかのぼる。最初のパートナーシップはかつてロンドンの印刷所で共に働いていたトマス・ホワイトマーシュ（Thomas Whitmarsh）との間で交わされた。パートナーシップの仕組みについてフランクリンは、次のように説明している。

In 1733, I sent one of my Journeymen to Charleston South Caroline where a Printer was wanting. I furnish'd him with a Press and Letters, on an Agreement of Partnership, by which I was to receive One Third of the Profits of the Business, Paying One Third of the Expence. (BF 1399)

ホワイトマーシュはフランクリンと仕事ぶりが似ており（Frasca 67）、フランクリンは彼のことを“an excellent Workman”「腕利きの職人」（BF 1368）と称して彼を高く評価していた。フランクリンは、組合契約を結ぶ相手の仕事に対する姿勢を見極め、事業成功の可能性、言い換えるならば自らの投資の成功を見込んだ上で契約をしていた。フランクリン

にとってパートナーシップを結ぶことは、パートナーシップを結んだ相手を自身の管理下に置くことが可能だった。フラスカが指摘するようにフランクリンは「印刷(物)」を通じて読者に美德を説くことを可能にしている(Frasca 67)。してみれば、フランクリンは、パートナーシップを結ぶことで利益を得るだけでなく、自分自身の影響、つまり自分の考えを広く広めること、つまり情報や知識のコントロールをしていたと言えるのではないだろうか。

植民地南部に位置するチャールストンでの印刷所開設は、州の印刷をライバルの印刷業者に取り立てたことによりホワイトマーシュにとって苦しいものだった。しかしマラリヤや黄熱病の流行により、ライバルたちが死亡したことでホワイトマーシュは事業を軌道に乗せることに成功している。ホワイトマーシュは、フランクリンの発行していたペンシルヴェニア・ガゼットの南部版としてキャロライナ・ガゼットを発行していた。そこにはフランクリンと同様、公共に役立つもの、読者の教育を目指して新聞を発行しようとする姿勢が見られる(Frasca 71)。1733年にホワイトマーシュが死亡すると、フランクリンはジャントー会員でありフィラデルフィア図書館会社の初代司書だったルイス・ティモシー(Louis Timothee)を後任に据えている。しかしわずか6年後ティモシーも死去したため、その後は彼の妻エリザベス(Elizabeth)、さらに息子のピーター(Peter)が印刷所を運営した。ピーターはその後チャールストンで図書館を建て、また州の郵便局長という要職にも就き、フランクリンとの関わりは長く続くことになる。

フィラデルフィアを除く植民地北部の地域においては、フランクリンはかつてジャーニーマンとして雇っていたジェームズ・パーカー(James Parker)と契約を結びネットワーク拡大を展開している。その際、フランクリンは印刷所がある程度存在している地域は避けて印刷所開業の場所を選択している。例えばボストンにおいては1720年代にすでに印刷業者が4人いて、3つの新聞が発行されておりフランクリンはその数は多すぎると感じていた(Amory & Hall 249)。パーカーは1742年ニューヨークに印刷所をオープンさせ、さらにフランクリンの要望によりイエール大学のあるニューヘブンで店を構えている。1755年、ニューヘブンの店はジョン・ホルト(John Holt)とのパートナーシップに

より経営され、1753年には、ニューヨークの印刷所はかつて徒弟として雇っていたウィリアム・ウェイマン(William Weyman)とパートナーシップを結び運営していた。パーカーはウェイマンとのパートナーシップ解消により、一旦は甥のサミュエル・パーカー(Samuel Parker)にニューヨークの印刷所を任せるものの、結局ホルトがニューヨークへ行かざるを得ない状況に陥る。その後ニューヘブンの印刷所は、トマス・グリーン(Thomas Green)、さらにフランクリンの甥であるベンジャミン・メイコン(Benjamin Mecom)によって引き継がれることになる。フランクリンはメイコンを優先的に州議会の御用印刷人となれる地元の郵便局長にすることによって、事業を有利に展開することを試みている(Frasca 120)。またパーカーは出身地であるニュージャージーのウッドブリッジ、さらにバーリントンでも印刷所を出店している。

ニューヘブンよりさらに北部に位置するニューポートにおいて最初に印刷所を開業したのがフランクリンの兄ジェームズだった。ジェームズの死後、妻であるアン(Ann)が印刷所を引き継いだ一方、彼の息子ジェームズ(James)はフランクリン下で修業している。1754年には、息子ジェームズは新聞を発行し、彼の死後は再び母親のアンがサミュエル・ホール(Samuel Hall)とパートナーシップを結び印刷所経営を継続している。

フランクリンはサウス・キャロライナ以南へのネットワーク拡大も試みている。フランクリンはデイビッド・ホール(David Hall)を1年契約で雇い(Frasca 81)、彼の人となりを確認しその後彼を西インド諸島に送ろうと考えていた³。しかし1747年にフィラデルフィアの自身の印刷所を彼に任せることにする。そのことについてフランクリンは下記のように語っている。

… and I went thro'it the more cheerfully, as it did not then interfere with my private Business, having the Year before taken a very able, industrious & honest Partner, Mr David Hall, with whose Character I was well acquainted, as he had work'd for me four years. He took off my Hands all Care of the Printing-Office, paying me punctually my Share of the Profits. This Partnership

continued Eighteen Years, successfully for us Both. (BF 1420)

フランクリンの西インド諸島における印刷所開業の思いは消えず、先述したパーカーの下でジャーニーマンとして働いていたトマス・スミス (Thomas Smith) が1748年にアンティグアのセント・ジョンへ送られている。1752年スミスが死亡した後、まだ20歳前のフランクリンの甥であるメイコンが送られる。その若さのためフランクリンは不安を抱きつつ彼を送ったわけだが、実際メイコンは印刷所の資金の管理能力に欠けており、その結果1756年にはアンティグアを去ることになる。同時期フランクリンはジャマイカの印刷業者であるウィリアム・ダニエル (William Daniel) とともに西インド諸島でパートナー関係にあったとされている (Frasca 94)。

1760年代になるとフランクリンは西インド諸島ドミニカにおいてウィリアム・スミス (William Smith) と契約を結んでいる。その他バルバドスに印刷所を構えていたフランクリンの妻デボラ (Deborah) のいとこにあたるウィリアム・ダンラップ (William Dunlap) とともにパートナーシップ関係にあったと言われている (Frasca 95)。

フランクリンは自身の影響の地理的拡大のみならず西インド諸島におけるモラルの向上、実用的かつ地方性のある新聞の発行、さらにはかつてのライバルの印刷業者たち、例えばサミュエル・キーマーやデイヴィッド・ハリー (David Harry) らが失敗に終わったところでの成功を目指して西インド諸島での印刷業経営にこだわった。しかし上記のパートナーシップを結んだ印刷業者たちはいずれも失敗している。これらの失敗についてフランクリンは自身の執筆物において触れていないため、その原因等詳細がよくわからないのが現状である。しかしながら派遣された印刷業者の人となりについて、かつてパートナーシップを結んでいた人物たちと比較して、フランクリン自身が把握しきれていなかったこと、さらに当初は避けていた身内の派遣へとシフトしてしまったことは大きな原因として挙げることが可能であろう。

そしてペンシルヴェニアにおけるフランクリンのパートナーシップは、当時ペンシルヴェニアに増え続けていたドイツ移民に対応するためにも結ばれている。フランクリンは、ドイツ人が文化的主流派に

なることによる力のバランスの崩壊を危惧し、ドイツ移民のイギリス人への同化を目指していた。

フランクリンは、1732年に初めてルイス・ティモシーを使ってドイツ語の新聞を発行することに着手する。フランクリンとティモシーは300人の購読者の獲得を目標にしたものの結局50人しか得ることはできず、彼らの新聞は失敗に終わっている (Frasca 104)。その一方フランクリンらが失敗した街で1739年にクリストファー・サウアー (Christopher Sauer) が発行した新聞は4000人の購読者を獲得している (Frasca 105)。フランクリンはサウアーの新聞によるドイツ移民たちへの影響に危機感を抱き、彼こそが文化的融合の妨げになっていると考えていた。そこで1749年にヨハン・ベーム (Johann Bohm) とパートナーシップを結び、フィラデルフィアにおいてドイツ語と英語の二ヶ国語による新聞を発行する。フランクリンは二ヶ国語で発行することで、ドイツ人購読者のイギリス化を狙い、ドイツ人以外の購読者に対してはドイツ語への理解の場を提供しようとしたのだった。

さらにフランクリンはかつてのジャーニーマンだったサミュエル・ホーランド (Samuel Holland) とヘンリー・ミラー (Henry Miller) と契約し、ドイツ人人口の高いランカスターにおいてドイツ語と英語の二ヶ国語による新聞を発行させている。フランクリンはホーランドをランカスターの郵便局長に据えるが、サウアーの勢いはフィラデルフィアでもランカスターにおいても衰えることはなかった。

その後フランクリンはランカスターにダンラップを送っている。ダンラップは新聞発行に意欲を見せていたが、結局発行できないままランカスターを後にしている。フラスカが述べているように、ドイツ人移民啓蒙のためのフランクリンの印刷業のパートナーシップはいずれも失敗に終わっているにもかかわらず、フランクリンはドイツ人移民をイギリス化すること、イギリス人の考え方の共有させること、もっと独立心を抱かせることなどの思いは決して消えることはなかった (Frasca 109)。そこには、長引く本国対フランスとの戦いにおいてドイツ人がフランス側に加担するという恐れがあったのかもしれない。

1754年、フランクリンはドイツ人移民向けのフリースクールを計画し、ドイツ生まれのペンシルヴェニアの牧師であるヘンリー・メルキオール・メヘン

バーク (Henry Melchior Muhlenberg) の賛同を得ることに成功する。そこで翌年、ドイツ人移民のアンソニー・アームブラスター (Anthony Armbruster) とパートナーシップを結び、ドイツ語と英語の二ヶ国語による新聞を発行する。しかし1757年には購読者は500人よりも少なく、フランクリン自身アームブラスターとのパートナーシップから距離を置くという態度をとっている (Frasca 112-13)。このパートナーシップは1758年で終わっている (Thomas 382)。

結局ドイツ人移民の同化に向けてフランクリンが結んだ6人とのパートナーシップは失敗に終わり、ドイツ人たちの教育に与えたフランクリンの影響の大きさについては疑問の余地が残るところである。

フランクリンとパートナーシップを結んでいた、あるいは彼の下で一時的にでも働いていた、彼とパートナーシップを結んでいた印刷業者とパートナーシップを結んでいた印刷業者は他にも大勢いる。フランクリンが印刷業からほとんど身を引いていた時期においても、例えばフランクリンの孫のベンジャミン・フランクリン・バーチ (Benjamin Franklin Bache) は、フランクリンに印刷業に関わるあらゆることを指導され、印刷所開業のための準備をすべて整えてもらっている。またパーカーのもとで徒弟奉公したウィリアム・ゴダード (William Goddard) は、プロビデンスやフィラデルフィアで印刷所を開いている。ゴダードは、フィラデルフィアにおいてフランクリンと関係のあったジョゼフ・ギャロウェイ (Joseph Galloway) とトマス・ウォートン (Thomas Wharton) とパートナーシップを結んでいる。その契約によると、フランクリンにも収益の九分の二が支払われることになっており (Thomas 390-91)、そこには相変わらずフランクリンの影響をみることが可能なのである。

IV まとめ

これまで見てきたように、フランクリンは自身の印刷ネットワークを北はニューポート、南は西インド諸島まで拡大することに一応の成功をみせている。それは当時の植民地の全土をほぼ網羅するものであり、印刷業者のネットワークは印刷業者だけではなく、印刷業者の発行する印刷物を読む読者をつなげ、ひいては植民地をひとつにつなげていたとも言える

だろう。それは印刷業界、あるいは情報のネットワークのなかでフランクリンが中心にいたことを証明している。1737年にフィラデルフィア郵便局長、そして1753年に郵政長官代理の職に就いたフランクリンは、パートナーシップを結んだ印刷業者を印刷所開業した土地の郵便局長とし、州の御用印刷人の職も与えることで印刷所運営の便宜を図るとともに情報の一切を掌握しようとしている。1755年の終わりには、北米の15の新聞のうち8つがフランクリンとパートナーシップを結んでいたか、あるいは彼から何かしらの援助を受けていた。また残り7つのうちのひとつはかなりフランクリンと交流があったとされている (Frasca 196)。この事実を考慮すれば、当時いかに彼の印刷ネットワークが植民地において情報収集力、あるいは情報発信力を持っており、彼の考え方、あるいは教えが広く購読者に広まっていたかが容易に理解できるだろう。

フランクリンの印刷ネットワークの特徴は、フラスカが指摘しているようにそれ以前とは対照的にフランクリンが積極的に家族や親族以外の者たちを取り込んだことにある (Frasca 204)。フランクリンがパートナーシップを結ぶ際に重視したことは、印刷業者の技術であり、仕事に対する姿勢だった。そして最も重視したことがフランクリンの考えを共有できるかどうか、あるいは自分と同じ信条を持っているかということだったと思われる。考え方の共有は、フランクリンが発行した印刷物を自らが経営する印刷所で再発行することで実現される。これはフランクリンの考えが購読者に広まることを意味しており、これこそがフランクリンの狙いだったと言える。彼は植民地を政治的あるいは文化的に統合できる可能性があると考えていたし、植民地の未来のためにそうしなければならないと考えていたはずである。ネットワークを通じて、植民地のできるだけ多くの地域に同じ情報が等しく浸透することで、市民を教育し、同じ目標に向かわせることが可能となる。

フランクリンの植民地統合に対する思いは、1754年5月9日付のペンシルヴェニア・ガゼットに掲載されたアメリカ最初のカトゥーンとして知られるイラストに明瞭に描かれている。それは分割された蛇それぞれに州のイニシャルがつけられており、「団結するか、それとも死か」という言葉が添えられているものだった。当時、植民地はフランスから

攻撃を受けており、これに対抗するためにフランクリンは1754年6月のオールバニー会議において植民地連合統一案を提案し、その後の州会や本国では否決されることになるものの会議においては採択されている。フランクリンの統一案はこの時点では、本国からの独立を意図したものではなかった。しかしながら、ネットワークという発想によって本国に比べて小さく、孤立しているそれぞれの植民地は、ひとつにまとめることが可能となった。それは、植民地全体の存在意義、あるいは存在意識を高め、ひいては植民地独立へと導くきっかけとなっているのではないだろうか。

フランクリンのネットワークは、彼を自立させ、出世へと導いてくれた。同時に植民地を独立にむけて静かにあるいは無意識のまま準備させるかのようにならず統合を目指すことを試みていたように感じられるのである。そして実際にネットワークによる統合は、これ以降植民地をフランクリンと同じようにイギリスという親からしっかりと独立させ、親以上の力を持つまでに成長させるのである。

注

- 1 スコットランド生まれの牧師であるジョージ・キースがペンシルヴェニアのクエーカー教徒の有力者と衝突して事件を起こした際、ブラッドフォードはキースの味方をしたために罰せられた。
- 2 ニューヨークの印刷業者であった、ジョン・ピーター・ゼンガーは、自分自身が発行した新聞においてニューヨーク総督のウィリアム・コスビーを批判した廉で逮捕される。その弁護を引き受けたのがハミルトンであり、彼はゼンガーの記事が真実であるならば彼は無罪であるべきと主張し、見事無罪を勝ち得る。
- 3 ホールを紹介してくれたロンドンの有名な印刷業者であるウィリアム・ストラハンに対して、フランクリンはホールの人柄や彼の持つ技術次第で彼に4つ目の印刷所を任せる意向である手紙を送っている (Benjamin Franklin to William Strahan, September 18, July 10, 1743 in *The Papers of Benjamin Franklin*. New Haven: Yale University, 1960)。

引用文献

- Amory, Hugh and Hall David D. eds. *A History of the Book in America Volume 1: The Colonial Book in the Atlantic World*. United Kingdom: Cambridge University Press, 2000.
- Frasca, Ralph. *Benjamin Franklin's Printing Network: Disseminating Virtue in Early America*. Missouri: University of Missouri Press, 2006.
- Laird, Pamela Walker. *Pull: Networking and Success since Benjamin Franklin*. Massachusetts: Harvard University Press, 2006.
- Lemay, J. A. Leo, eds. *Benjamin Franklin, Writings*. New York: The Library of America, 1987. ベンジャミン・フランクリンの引用はすべてこの版を用い、括弧内に略称 (BF) と頁数を示す。なお日本語訳は、松本慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』(岩波書店, 2005年) に拠っている。
- Thomas, Isaiah. *The History of Printing in America: With a Biography of Printers & an Account of Newspapers*. New York: Weathervane Books, 1970.
- Wood, Gordon S. *The Americanization of Benjamin Franklin*. New York: Penguin Books, 2005.

(2011年10月19日受付)

(2011年12月14日受理)